JASE
現代性教育研究ジャーナル
2014年
No. 43
2014年10月15日（毎月15日）発行
日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2014 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

「関西性教育研修セミナー2014夏」報告 …… 1
「東京性教育研修セミナー2014夏」報告 …… 6
もっと知りたい女子の性④…… 8
性教育の歴史を尋ねる⑲…… 10
今月のブックガイド…… 11
JASEインフォメーション …… 12

◉「関西性教育研修セミナー 2014 夏」報告◉オトコの性と神話シリーズⅡ

射精する身体と性教育

2014 年 9 月 6 日（土曜日）午後 1 時 15 分より、大阪府立大学「I-site なんば」において、オトコの性と神話シリーズⅡ「射精する身体と性教育」をテーマに関西性教育研修セミナーが開催された。セミナーでは、5 月に『男子の性教育』を上梓した村瀬幸浩氏を講師に迎え講演していただいた。講演後、講師と参加者の間でディスカッションが行われた。その要旨を掲載する。

主催：関西性教育研修セミナー実行委員会

はじめに

自分の性を肯定的に受け入れられない若い男性が増えているといわれています。

学校でも、地域社会でも、性教育に与えられる時間と回数はごくわずかです。選ばれる話題は、デート DV やハラスメント、性暴力や望まない妊娠、HIV/AIDS や感染症など、リスクや被害を扱ったものが多く、「性の豊かさ」を聞く、語る、学ぶ機会はほとんどありません。

ここ数年来、強く自覚したことは、人間の性のプラスもマイナスも含めて、全体を語っていく、その中で、問題はやはり「オトコの性」だと。その場合、男のネガティブな、否定的な面が前面に出るんじゃなくて、「オトコの性」そのものを客観的に、科学的にしっかり捉え直すというところからスタートしなければいけないと思ったわけです。

射精観の調査結果

その大きなきっかけの一つが、北海道の高校生の月経観、射精観の調査でした。

月経をどう見るかということは、昔からいろんな調査がありましたけれども、射精をどう見るかということについての調査は、寡聞ながら、私は知りませんでした。思春期、青年期、高校生年代の人たち

がどんなふうに射精を捉えているかという調査です。

例えば「射精は汚らわしいもの」と思っているのは男性が14.3%、女性は8.6%です。「射精は恥ずかしいもの」では、男性の19.5%がそう感じている。それから、「射精は面倒なもの」というのは、男性7.4%、女性11.7%です。「射精は自然なもの」というのは男性が78.2%、多いという見方もできますが、21.8%は、そう思わないということです。この21.8%という数字は、「射精は恥ずかしいもの」の19.5%とほぼ同じ割合で、２割ぐらいの男子学生が自分の性のありようを否定的に、あるいは肯定的に捉え切れていないということが言えます。このことは、大学生のリポートなどでも気がつくことです。「射精は誇りに思えるもの」というのも20.3%です。「射精は気持ちがいいもの」というのは66.7%という数字です。33%の男性が気持ちいいものと思っていないということです。

正直かなり衝撃でした。講演会へ出かけたときに、男性の方も参加されることがありますから、終わった後、懇親会で「あなた、自分の射精のとき、どう思いましたか」とか、あるいは「マスターベーションというのをどんなふうに自分で受けとめていらっしゃいますか」という話を聞きます。多くの方が、ポジティブではないのです。

ネガティブな刷り込み

最初に射精したときは、「うみが出て気持ち悪いと思った」とか、「射精したときは、何となく気持ちがいいと思うんだけど、こんなことをやっていたらみっともねえなと思った」。それから「もうこんなことはすまいというように思ったんだけど、また4～5日すると、あるいは1週間もしないうちにムクムクしていて手がペニスに行っている」、そういうことを繰り返し、繰り返しするなかで、オトコの性は嫌らしい、下品だ、汚い、こういったものが刷り込まれた、というふうに率直におっしゃる男性が少なからずいます。

なぜ男性たちが、射精という問題をネガティブに捉えてしまうのか。これはいろいろあります。簡単に言うと、「白くドロっとしていて、ねばっとしていて、うみみたいで汚らしい」というふうな印象が1つです。2つ目は、尿道を通ってくるから汚いんじゃないかという意識です。そして、快感、気持ちがいいということを3割の人たちが否定しているように、気持ちがいいということがプラスにならないで、マイナスになってしまう。繰り返す自分ということで、ディスカウント（値引き）されていくということがあるのです。

細かく見ていきますと臭いもあります。臭いというのが、何か汚いということと重なるということもあります。

私は、なぜ白くドロっとしているのか、どんな意味があるのかということをきちんと、明らかにしたいと思い泌尿器科の本を随分読みました。ところが、書いてないのです。驚きましたねえ。一体どうなっているんだ。こんなに多くの青年たちが、何かベタッとして汚らしいものと思っているものは一体何なんだということを、なぜ科学は教えないのか、と思いました。

そのときに思ったのは、もし女性に対して、月経学習がされなかったら、ということです。なぜ女性に対して性教育、あるいは性のいろいろなことを教えたかというと、これは産む性だからです。月経の話も、授業も、学生にしてみると、すぐ産む性につながっていき、生殖の性につながっていく、女は産むものだ、そういう刷り込みにつながっていきます。必ずしもいい面ばっかりではありません、むしろ女性の性を産む性に限定するという意味では、マイナス面を持っています。そういう意味では、月経学習も要注意ですけれども、少なくとも月経というものがある。それは意味があるんだということや、こういう手当てをするんだよ、と教えるということは必要です。それを学校もやってきたし、親もやってきたし、周りの大人たちはみんなやってきました。

学習指導要領が変わって、教科書が変わって、性の話がちょっと入ってきました。4年生の中に「精

通」という項目があります。でも、基本的には精通という現象が起こりますということが書いてあるだけです。白くねばっとしていて、ドロっとしてとか、あれはどういうものかということは書いてありません。精通があって、そこから妊娠する力を持つというような記述も十分ではありません。ともかく、男の子が本当に悩んでいる、ドロっとしているとか、尿道を通ってくるとかということについては、何も書いてないのです。

矢沢潔さんが書いた『日本人の精子力』という学研新書の本があります。この中に、白っぽいのは果糖の結晶という表現があります。果糖というのは糖分です。精子にとっての栄養分になるものです。精子は自分の中にエネルギー源を持っていないのです。精巣でつくられた段階では、自分で動く力を持っていません。

射精の合図が出ますと精嚢から出てきた液体とまじります。精嚢の中に果糖という成分があるのです。この果糖とまじることによって精子は活動力を持つのです。

もう一つ、ねばっとしている。これはフィブリンという繊維質の入った液体がまじる中に精液が含められて膣の中に入っていく、と書いてありました。なぜかといいますと、膣の中は酸性環境で、精子は酸性と熱に弱いのです。子宮に入っていっても、そこにはマクロファージというのがおりまして、異物を次から次へと食いつぶすわけです。やっと数百が生き残って、守られて卵子に到達していくということになります。しかし卵子のバリアがありますから、それを突き破るのはほんのわずかしか突き破れないわけです。その精子が少しでも多く生き残れるように、つまり前立腺の中のフィブリンがそれを取り込んで、酸性環境から精子を守るわけです。

男子学生も含めて、もちろん女子学生もそうですが、全然知りませんから、「へえー、そんなことだったんだ」ということで、感動する学生がいます。それから、尿道は、膀胱の中にあった尿が出てくるわけですが、健康な人の尿の中にはばい菌がありません。尿にばい菌がまじっている人は、尿道炎か膀胱炎の人で、健康な人の尿にはばい菌はまじっておりません。そこを通っていっても汚いものではないのです。

これも知らない人が多いのですが、射精の合図が出ると、膀胱のすぐ下の内尿道括約筋が締まってあかないのです。つまり膀胱にあった尿と精液がまじらないようになっています。

この２つのことがわかるということがまず大事で、あと３つ目、気持ちがいいというのは、なぜ気持ちがいいのかということはなかなか難しいのですが、恐らく気持ちがいいから人間は性行為をやめないのでしょう。

この気持ちがいいという問題も、下品、いやらしい、悪いことという先入観とずうっと絡んできています。考えてみれば、子どものころから、ペニスにさわっていると、「そんなところをさわるんじゃない」とか、「ばっちいところ」とか、「おしっこは汚い」とか、言われ続けてきました。

マスターベーションから セルフプレジャーへ

「マスターベーション」を日本語に直訳すれば、「手淫」とか、「自涜」という字を当てます。医学書にもそう書いてあります。マスターベーションはよくないことというのは、これまた刷り込みです。私は、これも根本から切りかえたい。マスターベーションはいい行為である。自分の体をポジティブに理解していくうえでは、自慰行為というのはいい行為である。ただし、これは他の人が気がつくと不快に思ったりするから、自分だけの世界でする。自分だけの空間でするということはエチケットでもあり、マナーであります。しかし汚らわしいことと思う必要はないということを、私は中学校などから講演を頼まれると、中学生にはお話ししています。

もっとも、マスターベーションというのは中学校学習指導要領に載っていませんので、事前に校長先生に「マスターベーションの話をしていいですか」というふうに言います。男の子の電話相談のベスト３は、包茎とマスターベーションと、それから射精の問題、つまり性欲の問題です。この問題にきちんと答えなければ、講演会は意味ないと思いますよ、と言うんです。「話していいですか」と言って、校長先生も、講師がそう言うのならいいだろうということもあって、「あ、いいですよ」と言う人もいま

すし、「やってください」と積極的に言う人もいるし、「いやあ……」と言う人がいますから、そういうときには「じゃ、言いません」と言うんですけど、「後で聞きにおいで」と言ったりするんですが。

いずれにしても、この問題は、思春期だけではありません、生涯です。生涯の男の性的人生にとって、私は、マスターベーションを「セルフプレジャー」という言い方に切りかえる。「自慰」という言葉もあって、これも悪い言葉ではないと思いますし、もちろん「自涜」や「手淫」よりはずうっといいんですが、自ら慰めるというのも、ちょっと何となく後ろめたい気がどこかでして、背中を向けてこっそりやっている、慰めるという言葉、そうではなくて、これはプレジャーなんだよ、自分の性をちゃんとみつめて楽しんでいく、自分の性欲とつき合っていこうよというポジティブな意味では、「セルフプレジャー」。

そして、これはぜひ性科学辞典とか、性教育辞典の中にも「セルフプレジャー」という言葉を公認していくような方向を追求したいと思っています。日本語に訳すと、「自己快楽」になるのですが、自己快楽という言葉も悪くありませんが、まあ、むしろ「セルフプレジャー」でいいんじゃないかというふうに私は思っています。

高齢者に話すことも、数年前から多いんです。今、高齢者の性も大問題です。高齢者人口は増えていて、人口の４分の１は65歳以上になっています。個人差はあるけれども、性の問題も欠くことのできないテーマになってきています。

若い人もそうですが、今、性交体験がどんどん減っています。調査のたびに減っています。そして、60歳になっても、70歳になっても男性の場合、マスターベーション、週１回とか週２回とか、あるいはしない人もいますけれども、70歳になっても週何回とか、月何回とかというふうに、結構多いのです。つまり、男性の性、個人差は前提ですけれども、性的な欲求とか関心というのはなくならないんです。なくなる人もいると思いますが、なくならない人が多いのです。

私は、マスターベーションから「セルフプレジャー」という言葉にあえて言いかえて、人生の健康問題にしなければいけないと思っています。そして、そういう声を通じて、性の主体者としての自覚から、体、性器への愛着やいとしさ、どこをどうさわったら気持ちいいかが自分でわかる、それから、自分は自分だという意味では、精神的自立への契機です。

岡田尊司さんという精神医学者の本を読んでいましたら、性的な逸脱行為を起こすような若者の中には、マスターベーションを自分でできない、したことがないという人が有意に多いと書いてありました。そういう人を相手にしてカウンセリングなどをしていると、「したことがない」、「あれはしてはいけないというふうに言われた」と言う。そういうように、自分の性にしっかり立ち向かえない。だから、これは精神的な自立という点からいっても、自分の性欲を自分で管理できるということは、とても有意な意味があります。

大正時代に一時期、日本の性教育という言葉ができて、何人かの人が論文を書いて、性教育論が盛り上がることがありましたが、これを読んでみますと、ほとんど男のマスターベーション抑制論に尽きると思います。戦後になると、今度は純潔論で、女性の性欲の抑えつけになり、男は野放しになります。
そのことが尾を引いていまして、「やり過ぎるとばかになる」とか、「あんまり若いうちからやると精子がなくなって子どもができなくなる」とか、こんなことばかり言って、あげくの果てに「猿は死ぬまでやる」とか、誰が言ったか知りませんが、そんなことを言って脅しつけるというのがありました。

オックスフォードなどの大学は、寄宿舎などは、寝るときに手は全部毛布の上に出させる。それを交代で点検するという。パジャマのポケットを手が入らないようにし、手は全部毛布の上に出すというようにしつけられていたと聞きました。男性の性の快感というものを罪意識、罪悪感視するというのが歴史的に長かった。宗教としての性の考え方がベースだと思いますが、それが尾を引いています。

男子の性教育

男子の性教育は、最初の精通をいかにして肯定的に迎え入れるかというところから出発しなければならない、。小学校高学年、とくに中学１、２年で、射精からマスターベーションのことについてしっか

り教えなければいけないと思っています。そのことによって救われる男の子がものすごくたくさんいると私は思います。

もちろん私は女性のマスターベーション、セルフプレジャーも、同じように結構だというふうに言っていますし、男女の区別はない。自分の体、自分の性器を自分が好きなようにさわって快感を得てほっとするというのは、これは当たり前のことだということを女性にも言っています。データで見ても、だんだん女性のセルフプレジャーの率も高まってきていますけれども、男性に比べれば少ないです。回数をふやすのがいいとは思っていませんが、でも、そのことをネガティブに捉えている人がまだ多い。

みずからの性の肯定的理解を通して自分に自信と安心を育てる。それから、男の子が性的に成熟する、射精があったときには、生殖能力を持ち始めるということについての自覚です。これもほとんど男の子にはそういうメッセージはあまりなくて、女の子は月経が始まると妊娠、妊娠と言いますけれども、男の子がそういう能力を持ち始めたこと、妊娠させる力を持ち始めたなどということはあまり言わない。このこともちゃんと言わなければいけない。君たちは、妊娠させる力を持っているんだということを言わなければいけないと思いますが、これも十分ではありません。

３つ目は、女子への性です。男子の女性に対する性の理解は全くプアです。女には月経があって、排卵期があって、黄体期にはこんなに体が変わっていく、そのときに体がむくんだり、便秘ぎみになったり、頭痛になったり、体調がかんばしくない時期があるということ。そのあと月経を迎えると低温期に向かって体調がよくなるのだけれども、その結果、妊娠がしやすい体に変わっていくという、この２つのホルモンがうねりながら、女性の生理だけではなくて、心理も大きく揺さぶっていく。こういったことなどは、高校生のうちからちゃんと教えなければいけません。

また、ここでは時間の関係もあって十分ふれられないけれども、男子の性を考えるうえで「性被害」についてとりあげなければなりません。従来男子は性加害者としてばかり位置づけられてきました。たしかに加害のほとんどは男子の側にあるわけですから、そうした指摘や教育は欠かせません。しかし、男子もまた被害者になっている。なっているが男ジェンダーの縛りがあって被害を訴えたりできない。屈辱に耐え、耐えられなくて心を病んだり、あるいは自傷から自死（殺）に向かったりしています。また男子の性被害は、そのままにしておくと、やがて加害者に立場をかえることがあります。研究者によれは20％～30％くらいがそう考えられるとありますが、これは決して軽視、無視してはならない大きな問題です。性被害、性虐待は性別とかかわりなくその人の人格を深いところで傷つけゆがめていく暴力です。このことを男子にも学ばせ被害を訴える力と加害の立場に立たない教育が不可欠だと思います。

それと、多様な性の問題があります。性別違和感の問題も含めて、あるいはセクシュアリティの問題も含めて、さまざまな性を持つ人たちがいる。自分の中にも、単色ではなくて、さまざまな男性性を持っている。女性に近い部分も持っています。そういった人間の多様性を持った個別性の豊かさ、そこに人間の性の限りない豊かさがあるということです。

だから、性教育はいろいろなバッシングがあって、行き詰まったような時期を経過しましたけれども、それは乗り越えられ始めていると僕は思っています。私ども研究団体にもいろいろなことがあって、苦労した人がいっぱいいますけれども、だけど、こんなものは世界の潮流から言えば、全く時代おくれで、アジアの中でもこんな国はもうありません。世界をみれば、まったく大きな展望が開かれつつあるのです。

そのときに、これから大事なのは、男子への性教育です。これまで性教育はずうっと女性用でした。女性の性です。しかも、リーダーはほとんど女性です。

学者には男性がいますけれども、実際に現場でやっているのは女性が多い。もちろん、女性が語る女性の性には大きな意味がありますけれども、男性に視座を移していくという部分をもっともっと重点化しないと、関係性の問題になかなか行き着かないと思います。そんなことを考えていく必要があるのではないかと思っているということを最後につけ加えて、私の話を終わりにしたいと思います。

◉「東京性教育研修セミナー 2014 夏」報告◉

第５回世界性の健康デー記念イベント 2014　in 東京

性の健康、性的にいい状態であること

世界性の健康デー（World Sexual Health Day；WSHD）とは、世界性の健康学会が提唱した記念日。2010 年から世界各国で関連イベントが開催されている。2014 年のテーマは「性の健康、性的にいい状態であること（Sexual Health：the wellbeing of Sexuality）」。

東京では、９月７日（日）新宿区四谷の持田製薬本社ビルのルークホールで開催された。

主催：WSHD 記念イベント東京実行委員会

ワールドカフェ

普通の人の普通の性とは？

午前 11 時から「普通の人の普通の性とは？」をテーマにワールドカフェが開催された。

司会進行は、理学療法士として、お産後のママの治療を行っているマタニティリハビリテーションネットワークの福岡由理氏。

具体的なテーマは、「内診カーテンについて」「夫婦間コンドームの使用について」「セックスレスについて」の３テーマである。

会場の参加者がそれぞれのテーマごとに４人～５人のグループに分かれて、約５分ディスカッションを行い、その内容の発表を行い、その後各コーディネーターが発表に対するコメントとご自分の意見を述べられた。

コーディネーターは、NPO 法人 JASH 日本性の健康協会理事で、助産師、バースセラピスト（産前産後の心と体を癒すセラピストとしてご自分で命名した肩書）のやまがたてるえ氏、神奈川県藤沢市のベット数 300 床の病院で総合診療科の勤務医をしている片岡侑史氏と静岡県清水町で子育て支援アドバイザーをしている花堂晴美氏。

「内診カーテン」については、産婦人科のみのことで、泌尿器科ではないという。男性社会の象徴的なものという意見も。多くの当事者たちは圧迫感を感じるので、オープンが望ましいという意見が大勢

第５回　世界性の健康デー記念イベント 2014　in 東京

東京性教育研修セミナー2014 夏

今年のテーマ Sexual Health: the wellbeing of Sexuality:

「性の健康、性的にいい状態であること」

世界性の健康デー(World Sexual Health Day: WSHD)とは、世界性の健康学会が提唱した記念日。2010 年から世界各国で関連イベントが開催されています。

日時：2014 年 9 月 7 日（日）10:00-16:30
場所：持田製薬本社ビル　ルークホール
（四谷駅徒歩 3 分）
入場料：大人 1000 円
（18 歳未満は無料、親同伴のみ可）

ディスカッションの様子

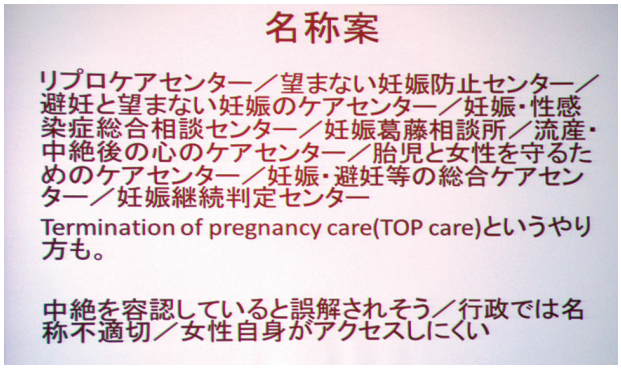
を占めていた。

「夫婦間コンドームの使用」については、女性は買いにくいので、女性目線のパッケージがあってもいいのでは、などの意見があった。コンドームが完璧な避妊ではないというデータも示された。

「セックスレス」については、夫婦間のセックスレスだけでなく、若い人たちにセックスレスが増えている原因の一つに、コミュニケーションが苦手な男性が増えていることがあるという意見があった。

コーディネーターのお三方

講演会場の様子



間違いの多い教科書の内容を示し、改善を働きかける必要があるという発言が会場からあった。とくに学校で月経を生理というが、生理には、月経だけでなくさまざまな意味があるので、月経という正しい言葉を使うべきと強調された。

12時からの1時間は、大会議室で、昼食を食べながらのフリーディスカッションが、ブースエリアでは、マタリハ、タロット占いなどのイベントやグッズ販売などが行われていた。

当事者性を語る

午後1時30分から午後4時まで、「当事者性を語る」というメインテーマのもとに2つの講演が行われた。

午後1時30分からは、「女性目線の人工妊娠中絶ケアのあり方」をサブテーマに、本紙で「もっと知りたい女子の性」を連載中の「女子の性と健康を考える女性専門家の会」会長で産婦人科医の早乙女智子氏が講演された。

最初に、ご自分の生い立ちを交えながら、日本における人工妊娠中絶の現状を語り、中絶ケアの重要性を強調された。

早乙女氏は、この講演の中で「妊娠・中絶ケア総合センター」の設立を提案したことやその設立の必要性と名称についてのアンケートのさまざまな意見も紹介した。

名称に関するアンケートでは、「中絶を容認していると誤解されそう」、「行政では名称が不適切」、「女性がアクセスしにくい」という意見が出されたという。

講演の最後に、避妊や生殖技術の新しい技術や動きにについても紹介された。

午後3時からは、「ありのままの自分を愛するということ」をサブテーマに、こうぶんこうぞう氏の講演が行われた。

こうぶん氏は、主にこどもをモチーフに自分自身や現代社会を表現するアーティストとして活躍している。独特の世界観で描かれた子どもたちの瞳には、絶えず見るものに訴えかける眼力があるのが特徴といわれる。1996年の初個展以来、関西の百貨店（阪急・大丸・京阪）を中心に数十回の個展、2冊の画集を出版。2009年より現代アートに活動の場を広げ、枠組みにとらわれない自由な作風や子どもと現代社会を融合させた世界観が注目を集めている。アーティスト活動のほか、性同一性障害に関する講演、トークイベント等の活動もしている。

☆　☆

多彩なイベントが行われた「第5回世界性の健康デー記念イベント2014 in 東京」は、WSHD記念イベント東京実行委員会の主催、日本性教育協会、性と健康を考える女性専門家の会の共催で開催されたものである。

女子の性 隔月連載４

女子もしよう！　マスターベーション

早乙女智子
神奈川県立汐見台病院
産婦人科産科副科長

そもそも避妊と人口問題が専門の私ですが、手探りで性の相談を受け始め、2000年に日本性科学会の「セックスセラピスト」の資格認定をいただいてからいつの間にか15年。性の話で言えない言葉はもはやなくなりました。そこで、今日はあまり語られることのない女子のマスターベーションについて考えてみたいと思います。

◇　◇

マスターベーション、オナニー、自慰。どの用語を使ってもかまいませんが、要するに自分の性的欲求を自分で満たす行為のことです。性欲は誰にでもありますから、それを満たそうとするのも当然のことですが、習うわけでもなく、誰かに勧められることでもありませんから、女性の場合は特に後ろめたい感じで始めることが多かったり、性の相談外来で治療のためにお勧めしても、精神的に受け入れがたいと感じる女性は少なくありません。治療の一環として、自分のからだに自分で触れてみる、感じてみることを提案するのですが、どうも外陰部や膣は「自分のもの」と認識されていないようなのです。

◇　◇

日本の避妊は方法や考え方が欧米とかなり異なります。欧米で使用されている膣内に挿入する方法が導入されていないのです。例えば、イギリスで人気の「膣内リング」（NuvaRing）は、膣の奥の子宮口周囲にはめるもので、黄体ホルモンが少量ずつ出ることで避妊ができますが日本にはありません。また効果は劣るものの、子宮口に蓋をするような「子宮頸管キャップ」や「避妊スポンジ」などもありません。女性用コンドーム（フェミドーム）という女性の膣の内貼りのようなタイプのものも、日本ではあまり売れていません。膣内に入れるものでなくても、注射法やパッチ法、埋め込み法など、ある一定期間何もしないで避妊できる方法がことごとく導入されていないのは、海外に出るとどんな途上国？という顔をされるので大変恥ずかしく思います。先日出会ったベルギーのジャーナリストは、「トーキョーは何でも買えるけど、避妊は買えないんだね」と言っていました。そのとおり。

◇　◇

避妊法の中で、効果は低いのですが、面白い方法があります。それは前にも少しお話しした自然家族計画法（NFP: Natural Family Planning）です。避妊は効果が高くなければ意味がないのですが、最近好んでいろいろな講座の中でお伝えしています。というのはマスターベーションをしてみよう！　と言うより関心を引きやすいからです。その方法とは、毎日膣の中に自分で指を入れて……と話し始めたとたん、多くの方はやはり気持ちがひゅうっと引いていくのが話していてわかるのですが、気にしないで続けます。毎日、自分で触れてみると膣の奥にある「子宮口」を触れることができます。ピンポン玉のようにくるっと硬い丸いものを触れるのです。更年期以降の方で、ときどき膣の奥に「丸いできものができたけど癌でしょうか」という主訴で受診される方がいらっしゃいますが、大抵は子宮下垂で子宮口が下がって来て膣口の近くに触れるだけのことが多いのです。この子宮口は、排卵期以外は鼻の頭くらいの硬さなのですが、排卵期になると鼻翼の柔らかさになり、頸管粘液という少しさらさらした透明な液体が増えて子宮口自体も少し開いたようになります。カトリックの国や地域で使用されていたこの方法は、避妊器具や薬を使うことを禁じられていたために、自分で排卵日を知り、その日前後は禁欲をするという手段しかなかったようです。避妊法としては信頼できませんが、自分のからだを知る方法としてはとても面白く意味のあることだと思います。私は、もう一人授かったら産もうと思っていた30代後半に3年ほど試してみましたが、慣れてくると毎日指で確

認しなくても体のリズムがわかるようになり、排卵期の体温変化も体感できて、生活の仕方も月経周期に合わせて加減できるようになりました。性教育に関わる方で、性交経験のある方、ありそうな方にはお勧めです。逆に、これが出来ない大人が子どもたちに性教育をされるのはいかがなものか、とも思います。大人は性を楽しんでいいし、自分のからだは自分で把握すべきものだからです。

◇　◇

ついでに、少し避妊の話をすると、この春、ワシントンＤＣで受けた家庭医とナースプラクティショナーのための Women's Health 2014 の講義では、避妊は LARC（Long Acting Reversible Contraception：可逆的長期避妊）の時代だそうです。その順位に驚きました。

お勧め第１位は IUS（子宮内避妊システム）。若い女性でも使用できる３年物の Skyla が失敗がなく安全とのことでした。２位は、注射法（デポ・プロベラなど）、パッチ法（オーソ・エブラ）、埋め込み法（ノルプラントなど）。そして第３位がピルやコンドーム。つまり飲み忘れがあるピルも、着け損ねる可能性があるコンドームも同列３位の、テンポラリーな方法として位置づけられているということに時代の進歩を感じました。ちなみに、日本でも５年間有効の IUS（ミレーナ）は使用されており、今年９月からは過多月経での保険適用も始まったので、避妊用に自費で挿入するとしてもずいぶん安くなりました。効果的で、一定期間失敗がない避妊法が多々あるなかで、夫婦間やステディーなカップルでもコンドームを使用する日本の避妊は何かがおかしいと思うのは私だけでしょうか。特に夫婦間でのコンドームは差し控えるべきではないかとさえ思います。海外では、性に関する研究が日本より行われており、コンドームを使用しないカップルのほうが幸福感が高い――精子に抗うつ作用があるのか、という研究や、慢性的な夫婦間ストレスがあると物事をポジティブに考えられない、などの研究があります。「夫婦」「パートナー」という発想自体が時代遅れと考えることもできますが、少なくともそういったステディーな間柄では性感染症予防は不要ではないかと思います。

◇　◇

そう言うと、たいていの方は、「でも誰か他の人とセックスすることもあるでしょう？」と反論されます。「ええ、浮気の時はコンドームですよね」と答えると「それでも、相手から性感染症を貰うかもしれない」「ええ、ですから、浮気の時にはコンドームをすれば性感染症が防げるとお考えなのですよね」とお答えします。「浮気はコンドーム、本気は不要、ではだめですか？」「それとも……コンドームでは感染が防げないということでしょうか？」とお尋ねすると、「いえ、避妊とか……」「ですから避妊は他の方法で」「でもピルは怖いですよね」「それなら IUS がありますよ」「子宮に物を入れるのは抵抗があります」「ということはもっとも怖いのは妊娠では？　人が入るんですよ」「……」本気と浮気の区別がついていないのは、性教育をしている大人の方ではないか、そんなことを最近思っています。

セックスが、愛情表現であったり、道教 TAO で言うところの「氣」の交換であるとするならば、絶縁体としてのゴム製品を介しては成り立たないのではないかというのが、私のコンドーム敬遠論の根本です。挿入・射精を優先すれば、その場所は問わないのかもしれませんが、受け取る・受け取らないという女性サイドからは重要な問題です。その時に、今のところ女性にしか起こらない妊娠を回避するかどうかも女性の身体権として相手に任せるわけにはいかない重要なポイントだからこそ、避妊法の選択肢が少ないことは問題とすべきことでしょう。

今は、その先を行く 16 年間有効な皮下に埋め込むマイクロチップでプロゲストーゲンを体内に流して、ミニピルのような作用で排卵を押さえる避妊法が 2018 年度目途に開発されているそうです。基礎知識としてのコンドームも大事ですが、最新の知識と方法を手に入れることも忘れてはならないでしょう。

そして自分のからだを知るセックスの自主トレとしてのオナニーも、女性のセルフケアとして子宮頸がん健診と同じくらい推進したいところです。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第19回 純潔教育委員会から純潔教育分科審議会への改称(その3)

もてぎ　てるのり
女子栄養大学大学院栄養学研究科保健学専攻博士後期課程修了、博士（保健学）

文部省の純潔教育委員会は、1949（昭和24）年に純潔教育分科審議会（以下、「分科審議会」）へと改称されました。第16回で述べたとおり、後世の研究書のほとんどがこの改称の年月日を1950年4月24日と誤っていたのですが、では、正しい年月日がいつになるのかというと、候補となる日付が、3つ考えられます。

①文部省の機構改革によって、文部省設置法が施行され、また、「分科審議会」の名称が登場している文部省組織規程が適用された1949年6月1日。

②「分科審議会」の分担事項等を定めた社会教育審議会令が公布・施行された1949年7月5日。

③「分科審議会」の最初の会合が開催されたとみられる1949年9月16日。

どれも一定の根拠があり、私には一つに決め難く感じられます。「分科審議会」のメンバーでも認識が分かれていて、山室民子は「昭和二十四年九月からは名称も『純潔教育分科審議会』と変り（中略）再出発することゝなりました」[1]と③を、「分科審議会」の会長となった伊藤秀吉は「二十四年六月にいたり、文部省設置法（中略）の規定に基づいて、社会教育審議会が制定されたため、従来の委員は自動的に解消され、社会教育審議会の分科会として、純潔教育分科審議会が設けられ」た[2]と①を、「分科審議会」のスタートと捉えていたことがうかがえます。文部省社会教育局の視学官であった二宮徳馬も「二十四年の五月だったと思いますが、文部省設置法が出ました機会に、社会教育審議会というものが設けられまして、その一分科会という形で、従来あつた純潔教育委員会が切り替えられまして、純潔教育分科審議会という名前に改められました。中身は少しも変らず、仕事はそのまま継続されたのであります。」[3]と、5月31日に公布された文部省設置法に根拠を求めているので、①と考えられます。

ところで、文部省が第二次米国教育使節団のために作成した報告書（『日本における教育改革の進展』）では、純潔教育委員会について「昭和二十四年の文部省改組の際にこの委員会は、発展的解消を遂げて、社会教育審議会の純潔教育分科審議会となった。」[4]と評価されています。ここで「発展的解消」、あるいは山室が「再スタート」と表現しているのは、おそらく、伊藤が言うように、「従来の委員」が「自動的に解消され」、改めて委員が委嘱されたことを指すと考えられます。伊藤によると、「分科審議会」の委員に任命されたのは、イロハ順で以下の18名です[5]。

伊藤秀吉*（国民純潔協会常務理事）、大塚二郎（世田谷松沢中学校教頭）、ガントレット恒*（日本婦人矯風会会頭）、高嶋米峰*（評論家）、内藤文質（最高裁判所家庭局第三課長）、中村利枝（勝浦中央小学校PTA会長）、村岡花子*（評論家）、久慈直太郎*（日本赤十字社産院院長）、山本杉*（評論家）、山室たみ*（文部省社会教育施設課長）、近藤宏二（厚生省児童局母子衛生課長）、寺本慧達*（千代田女子学園学長）、安藤画一*（慶応義塾大学教授）、定方亀代*（大東学園病院院長）、溝口義方（東京都青年団連絡協議会）、望月衛（東宝映画株式会社）、守田直（江東区立数矢小学校々長）、千本木道子*（日本婦人矯風会常務理事）。

上記のうち、＊印をつけた11名が純潔教育委員会からの継続とみられます。ただし、高嶋米峰は1949年10月に死去しており、ほかに確認できる「分科審議会」の名簿[6]にはその名前がありません。

改称やメンバーの変更があっても、二宮が「仕事はそのまま継続された」と評しているように、前回述べた「純潔教育シリーズ」の刊行を含めて、純潔教育委員会の仕事は「分科審議会」に引き継がれていきます。

【注】

(1) 山室民子「純潔教育の研究問題」『新教育の研究手引』明治図書出版社 1950年 p.179

(2) 伊藤秀吉「純潔教育分科審議会」（各審議会、分科審議会のうごきII）『文部時報』877号帝国地方行政学会 1950年 p.36

(3) 二宮徳馬「純潔教育について」『第一回純潔教育指導者講習会』日本基督教矯風会 1959年 p.22

(4) 文部省編『日本における教育改革の進展―1950年8月文部省報告書』文部省 1950年 p.92

(5) 同（2）。なお、高嶋米峰が「高島光峰」、近藤宏二が「近藤安二」、守田直の所属が「江東区立教矢小学校々長」と記載されており、誤記とみられます。

(6) 以下3つの名簿（①文部省純潔教育審議会「男女交際のモラルとエチケット」『婦人公論』37巻1号中央公論社 1951年 p.208。②『現代礼法　文部省純潔教育分科審議会編「男女の交際と礼儀」解説』新制教育研究会 1951年 pp.3-5。③文部省社会教育局『社会教育における純潔教育の概況』1967年 p.137。）には、高嶋米峰を除く17名の名前が記載されています。

BOOK GUIDE
今月のブックガイド

ねこの秘密

山根明弘著
文春新書
定価 832 円

ねこ社会からヒト社会を見る

社会学者の山田昌弘氏はかつて、ペットも家族だ、ということを主張して学会関係者に一笑に付されたという。しかし昨今、ペットも家族の一員だという意識は少なからずの人たちに共有されるようになり、社会学においてもそうした位置づけで分析されるようになった。周囲を見渡しても、単身者で犬や猫を飼っている人はけっこういて、動物はもはや単なるペットではなく、人生の伴侶の役割すら担うようになっている。

かくいう私の乾いた毎日を潤してくれるのも、一匹のねこだったりする。が、子供の頃から計算すると 40 年以上ねこと生活を共にしているのに、彼らのことをあまりにも知らなかった。と教えられたのが、本書『ねこの秘密』である。

我が家の愛猫ふくちゃんは、生後３か月くらいのときに保護先からもらわれてきて、すでに５年ほど一緒に過ごしている。けれども、なついているというにはいつもつれない態度で、餌をもらうときと、暖を求める時期以外はとくに親しげに近よってくることもない。それをずっと「性格が悪い」と思っていたのだが、著者の山根明弘氏によると、生まれて３～９週間の「社会化」の時期に人間と触れ合って良いイメージを持つことができれば人間に慣れるが、そうでないと、ひとには警戒心を持ち続けるのだという。つまりうちに来たときにはすでに「社会化」の時期を過ぎていたわけで、どうりでどんなにしつけても「かわいい猫」にはならなかったはずだ。

というぐあいに、ねこについてあまりにも無知だった自分は、猫を人生の伴侶とする資格がなかったと反省するばかりである。妻のことを理解しようとしない夫が女性差別的だと非難されるなら、パートナーの猫のことを理解しようとしない飼い主も、人間中心主義として否定されてしかるべきだろう。そういう意味では、『ねこの秘密』を学ぶことは愛猫家にとって必須のはずだ。ここには猫の歴史的な由来からその生態、誕生から性行動、死ぬまでの一生が、動物学者によってわかりやすく解説されている。

ねこの性も実に面白い。発情したメスねこに対してオスねこは壮絶な争いをして求愛するのだが、どういうメスがモテるかというと、これが人間と反対？ なのだ。「…仔ねこを産み育て上げたことのない、あるいはそういう経験の少ない若いメスは、オスにとってはあまり魅力がないようです。…これまでに何度も繁殖し、仔ねこを何匹も無事に育て上げたメスは、たくさんのオスから求愛を受けることになります」。ねこ界では熟女が人気なのである！

また、オスの順位を無視して、若いオスと恋の逃避行をするメスがいたり（近親交配を避ける行動らしい）、オス同士の間に「同性愛」に見える現象が存在したり（マウントした相手の生殖への欲求をそぐため？）…ねこの性愛行動も一筋縄ではいかない。そこには人間同様、性が子づくりのみならず、関係や社会のなかにさまざまな形で現れ、機能している様を見ることができる。

そしてここが非常に興味深い点であるのだが、日本では年間 12 万匹を越えるねこが殺処分になっていて、著者はそれを深く憂いている。その原因は、無責任な飼い主にばかり押し付けることができないという。まったくの善意から、野良ねこに餌やりをすることで、栄養過剰になったねこがエネルギーを繁殖に回し、爆発的に増殖することで住人たちに疎まれるようになることも、その一因になっている。孤独な老人などの行き場のなかった愛情の発露が、結果としてねこを不幸にしてしまうことになるのだ。

ねこと、ねこの社会を深く観ることよって、私たちは自分たちと、その社会を知ることもできる。それはきれいごとでは済まされない、私たちの欲望の残酷な面をも皮肉に映し出しているのだ。　（作家　伏見憲明）

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

11月8日（土）14：00～16：00

平成 26 年度父親の子育て応援講座

もっともっと　いっしょに！

青山パパと子★教室

プログラム

①べつべつタイム 14：05～14：50

【パパ向け】

講義「父子のコミュニケーション術～子供の力を伸ばす関係づくり」

講師：黒澤浩樹（育児カウンセラー、メルマガ「子どもが育つ“父親術”」主宰）

【子供向け】

「絵本の読み聞かせ　等」

講師：子育て主夫ネットワーク「レノンパパ」

②いっしょタイム 15：10～15：55

【パパ＆子供】

「一緒にあそぼう！楽しい“パパあそび”」

講師：子育て主夫ネットワーク「レノンパパ」＆黒澤浩樹

会　場　東京ウィメンズプラザ ホール（渋谷区神宮前 5-53-67）

主催・問い合わせ等

参加費／無料　定員／ 40 組（申込み期限 10 月 31 日）
主　催／東京ウィメンズプラザ
問合せ先／東京ウィメンズプラザ事業推進係「父親の子育て応援講座」担当
TEL　03-5467-1980　FAX　03-5467-1977
E-mail：wkoza@tokyo-womens-plaza.metro.tokyo.jp

11/9（日）
11：00～16：00

第6回
あるこうよ
むらさきロード 2014
東京・表参道近辺

主に DV や性暴力、子どもの虐待などのサバイバー（被害経験者）が一緒に歩くパレード

DV 問題のみならず、性暴力、虐待、既存のジェンダー観によって疎外されていたセクシャルマイノリティ、女性の貧困、依存症などの問題にかかわっている人々、多くの方々と手を広げつないでいきたいと考えています。

「楽しく」・「平らに」・「多様に」暴力を容認せず、人と人が尊重して対等にゆける社会を目指して、うねりを起こしましょう。

【問い合せ先・申込み先等】

参加費／カンパ（1 口 1,000 円・自由）
申込み・問合せ先／むらさきロード実行委員会
TEL ＆ FAX　03-6807-8442 ～ 3
E-mail　arukoumurasaki@yahoo.co.jp
委員会ブログ　http://arukoumurasaki.blog37.fc2.com/
後　援／内閣府男女共同参画局

11月9日（日）13：00～16：30

第 14 回市民公開講座

HPV って何？

子宮頸がんの予防と治療の知識

内　容　特別講演「HPV とその周辺の話題」北村唯一（性の健康医学財団理事長）、講演①「HIV および性感染症のいろいろ」井戸田一朗（しらかば診療所院長）、講演②「ワクチン接種の推進に向けて」石渡　勇（石渡産婦人科病院院長）、講演③「HPV ワクチンの作用と副作用について」浜　六郎（医薬ビジランスセンター理事長）、講演④「男性性器の高い HPV 潜伏率について」重原一慶（石川県立中央病院泌尿器科医長）

会　場　水戸駅ビルエクセル6F「エクセルホール」

主催・問い合わせ等

参加費／無料　　定員／ 100 名（先着順）
主催・問合せ先／公益財団法人 性の健康医学財団
〒 113-0034　東京都文京区湯島 2-31-6
TEL　03-3813-4098　FAX　03-3813-4107
E-mail：info@jfshm.org

11月23日（日）10：00～17：00

国際基督教大学ジェンダー研究センター
開設 10 周年記念シンポジウム

境界と共生を問い直す

ナショナリティ、身体、ジェンダー・セクシュアリティ

内　容

第１部「対立を語り直す～ジェンダー・セクシュアリティの視点からレイシズムを考える」堀 真悟（CGS 準研究員）、菊地夏野（名古屋市立大学）、鄭暎惠（大妻女子大学）。

第２部「留学制度と身体の周縁化～「性」の議論の不在を問う」高松香奈（CGS 副センター長）、田中京子（名古屋大学）、虎岩朋加（名古屋大学）。

第３部「ディスカッション」

会　場　国際基督教大学ダイアログハウス２F 国際会議室（東京都三鷹市大沢 3-10-2）

主催・問い合わせ等

参加費等／無料・予約不要、英語同時通訳あり
主催・問合せ先／国際基督教大学ジェンダー研究センター
〒 181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2
国際基督教大学第一教育研究棟 (ERB-1) 301
TEL&FAX　0422-33-3448　　Email：cgs@icu.ac.jp

12月23日（火・祝日）13：15～16：30

関西性教育研修セミナー2014冬

現場からの発信！ 知的障がい児（者）への性教育実践の工夫あれこれ

「今の学校では、性教育がやりにくい」「なんとかやっているけれど、ほかの人はどうしているの？」。子どもや青年をとりまく性の問題が深刻化する現代だからこそ、子どもたちの今を支える支援と将来の成長や健康につながる教育が求められています。

昨今の性教育の〈やりにくさ〉を跳ね飛ばすような、パワフルな現場発信の性教育実践についてお届けします。
若手の教員や実践家による工夫や苦労を、一緒に分かち合いましょう！

講　師　船木 雄太郎氏（大阪府立泉北高等支援学校、養護教諭）
『せい』からひろがる、新しい自分をみつける～性に関する指導実践～
武子 愛氏（淑徳大学大学院／人間総合科学大学非常勤講師）
性のモラルを守るための性教育実践～軽度知的障害女性を対象に～
※研修とワークショップ120分、参加者とのディスカッション45分

会　場　大阪府立大学「I-site なんば」 C 1室（南海なんば第1ビル2F）
大阪市浪速区敷津東2－1－41　　TEL 06-7656-0441（代表）※会場の問い合わせのみ

参加費・申込み先等

参加費：一般1,000円、学生無料　　**主　催**：関西性教育研修セミナー運営委員会　　**協　賛**：日本性教育協会
申込み先：E-mail　higashi@sw.osakafu-u.ac.jp　FAX 072-254-9793（お名前・所属・連絡先を明記してお申込下さい）

「若者の性」白書

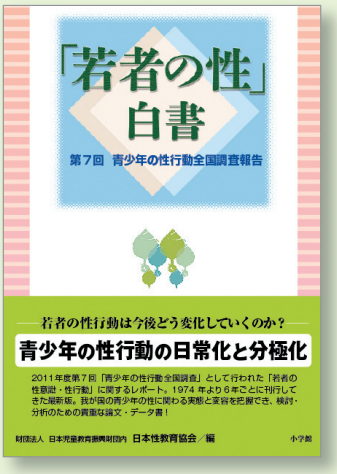
好評発売中!!

第7回　青少年の性行動全国調査報告

2011年度第7回「青少年の性行動全国調査」として行われた「若者の性意識・性行動」に関するレポート。

◆主な内容◆

序　章　第7回「青少年の性行動全国調査」の概要
第1章　青少年の性行動の低年齢化・分極化と性に対する新たな態度
第2章　欲望の時代からリスクの時代へ
—性の自己決定をめぐるパラドクス—
第3章　青少年の家庭環境と性行動
—家族危機は青少年の性行動を促進するのか—
第4章　消極化する高校生・大学生の性行動と結婚意識
第5章　青少年にみるカップル関係のイニシアチブと規範意識
第6章　高校生・大学生の避妊に関する意識と行動
—避妊行動の分化に着目して—
第7章　現代日本の若者の性的被害と恋人からの暴力
第8章　自慰経験による女子学生の分化
第9章　性情報源として学校の果たす役割
—性知識の伝達という観点から—
付表Ⅰ　「青少年の性に関する調査」調査票
付表Ⅱ　基礎集計表（学校種別・男女別）



編／財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会
発行／小学館

本体2,200円＋税●A5判256ページ

全国の書店にてご購入できます！